

文化情報学：駿河台大学文化情報学部紀要  
第10巻第1号（2003年6月）抜刷

## ラルフ・イーザウ『盗まれた記憶の博物館』について

櫻 井 千 絵

## ラルフ・イーザウ『盗まれた記憶の博物館』について

櫻井千絵

【要旨】 本稿はラルフ・イーザウの『盗まれた記憶の博物館』をミヒャエル・エンデの『はてしない物語』と比較しつつ、そのファンタジー文学特有の世界観と独自性を分析したものである。また物語の中で述べられている記憶の王国のモチーフを分析し20世紀ドイツで始まった記憶文学について考察する。

【キーワード】 ラルフ・イーザウ、『盗まれた記憶の博物館』、ミヒャエル・エンデ、『はてしない物語』、ファンタジー、記憶

## 1 はじめに

ラルフ・イーザウは1956年ベルリン生まれ、コンピューターのソフト・ウェア設計の仕事しながら物語を書き始めた。1995年に発表した「ネシャン・サーガ」シリーズがミヒャエル・エンデの目にとまったことをきっかけとし注目され、1997年『盗まれた記憶の博物館』ではブックステフダー賞を受賞。この賞は審査員の半数が読者の子どもたちで、かつてエンデの『はてしない物語』も受賞したものである<sup>1)</sup>。

エンデに認められたというイーザウの世界観を、『盗まれた記憶の博物館』を基にエンデの『はてしない物語』を参考としながら、共通点および独自性を考察する。

## 2 『盗まれた記憶の博物館』と『はてしない物語』

『盗まれた記憶の博物館』は双子の姉弟ジェシカとオリバーの家に警察がやってくるころから始まる。ベルリンのベルガモン博物館において貴重な古代の石像が盗まれ、博物館の夜警をしていた双子の父親に嫌疑がかけられているという。しかし警察に何を聞かれても驚いたことに双子は父

親の存在自体を忘れてしまっていた。石像はなぜ消えたのか、父親はどこへ消えたのか、そもそも双子はなぜたった一人の肉親である自分たちの父親を忘れてしまったのか。物語の冒頭から謎に満ちている。双子は父親とその記憶を取り戻すために、これらの謎を追い始める。屋根裏にしまっていた父トーマスの日記により、彼が実はかつて著名な考古学者であったこと、消えた石像は古代の王クセハーノ像であり、危険な存在であるということ、そして記憶の王国クワシニアの存在を知る。クワシニアとは人であれ、物であれ、人々の記憶から忘れ去られ、現実世界において存在意義が失われてしまったものたちが行き着く、いわば「記憶の墓場」であるという。古代バビロニアの謎を追っていたトーマスはなんらかの理由でクワシニアへ連れ去られ、現実世界に生きる二人の子どもの記憶からも消えてしまったのである。双子の弟オリバーは父親を連れ戻すためにクワシニアへ乗り込み、一方姉ジェシカは父親だけでなく弟の記憶も失いながらも、ベルガモン博物館の学芸員ミリアムと共にクワシニアの謎を解明し二つの世界の均衡を保つべく奔走する。

まず『はてしない物語』と『盗まれた記憶の博物館』二つの物語に共通する点は、ファンタジー作品であり、現代社会に生きる少年が空想、また

は記憶の世界へ入り込みさまざまな冒険を乗り越え、危機に瀕した双方の世界を救うという筋立てである。文学史上軽んじられてきた「ファンタジー」のジャンルが20世紀以降見直されてきた背景をここで概観する。

そもそもドイツ語のGeschichteという単語が示すように、物語とは事実を語る歴史と、事実ではないことを語るロマンスの二つがあった。その分岐点は時代によって変化するが、リアリズム小説が始まった時期には歴史との共通性を強調し、その他の文学と一線を画したため、次第に小説はそれが歴史らしく見えれば見えるほど高い評価をうけ、ロマンス的な形式の可能性を追求するのは、レベルの低い作家がやることと見なされるようになった<sup>2)</sup>。いわゆるファンタジー文学も虚構、非現実の世界を描いたものであり、現実逃避や妄想癖とみなされる傾向があった。『はてしない物語』でも主人公バスチアンは空想好きの少年であり、自ら物語を作ることを得意としていたが、そのため学校でも友人関係を築くことができず、いじめられっことなっていた。どれほどすばらしい物語を作り上げても、それは学校では評価されることもなく、バスチアンは教師からも学友からも見下された存在として描かれている。バスチアンの学校では事実が書かれた歴史は重視されるが、虚構の物語を読んだり作ったりすることは蔑視されるべきことなのだ。しかし現実世界の人間がこうして空想世界を悪しきものと否定することにより、実は自分たち現実の世界を危険に晒すこととなってしまった、両者は共存関係にあり、現実の人間の想像力により空想の世界は生まれ、空想世界があるからこそ現実世界は干からびることなく生を保つことができる。『はてしない物語』ではこの双方の世界の関係が明確に描かれている。

ファンタジー文学は20世紀に入り、J.R.R.トールキンの『指輪物語』をはじめ、単なる子供だましのおとぎ話ではなく、登場人物の成長や人間社会の確執や矛盾を突いた問題作が次々に登場した。次第に受け入れられてきたファンタジーの世界は、「そのままでは無秩序で不可能な出来事の集積に

すぎない」現実社会に「構造を与え」<sup>3)</sup>、「現実の世界がもっている歪みや矛盾を認識させ、それらを乗り越えていくためには何が必要であることを示すことができる」<sup>4)</sup>という新たな可能性が『はてしない物語』において、具現化していると言えよう。

### 3 行って戻ってくる物語 —バスチアンとオリバー

したがって『はてしない物語』では主人公が空想の世界ファンタージェンへ行って、そして現実世界へ戻ってくるということが非常に重要なこととなる。ファンタージェンに行くことができた者には、現実世界に戻り生命を吹き込む使命が課せられており、行ったきり戻ってこない者は現実逃避者であり、ファンタージェンでは「元帝王」と呼ばれ落ちぶれてしまうのである。

空想の世界と現実の世界を行き来する物語は他にも例はあるが、空想の世界が消えれば現実の世界にも大きな影響が及ぶという、二つの世界の共存関係が明確に描かれている点は『はてしない物語』と『盗まれた記憶の博物館』に共通する。『はてしない物語』の最後で古本屋の主人コレアンダー氏がバスチアンにこう述べる。「決してファンタージェンに行けない人間もいる。行くことができて向こうに行ったきりになってしまう人間もいる。それからファンタージェンへ行って、戻ってくるという人間も何人かはいる。君のように。そういう人間こそが両方の世界を健やかにするのだ。」<sup>5)</sup>『盗まれた記憶の博物館』のオリバーも両方の世界を健やかにするため行って戻ってきたと言える。

さてこのオリバーはバスチアンと似た要素をいくつか持っている。まず想像力豊かで、バスチアンは物語を作るのが得意であるのに対し、オリバーは絵画や音楽など芸術的才能に恵まれている。それぞれの家庭の境遇では早くに母親と死別したため、悲しみに心をふさぐ父親に育てられたという点も共通している。父親に対しての愛情が報われないことが、それぞれの才能を開花させる契機

となった可能性もある。また少々小太りで運動神経も鈍いという点も共通する。しかし一旦「向こう」の世界（『はてしない物語』では空想の国ファンタージェン、『盗まれた記憶の博物館』では記憶の王国クワシニア）に入り込むや、二人とも英雄となりさまざまな危険を乗り越え、精神的成長を遂げた上で現実世界へ戻ってくる。二作品とも作家が建設した独自の空想世界に、現実生きる子どもを送り込んでいる点も共通している。主要登場人物の年齢が低いのは、この二つの物語だけでなく児童文学全般の特徴であろう。読者の子供にとっては「現実を離れ、未知の、不可視の空想世界に入っていくことは容易なことではなく」「子どもは通常（現実と非現実との）国境線をひとりで越えない。彼らにはスポンサーか、ガイドが必要」<sup>6)</sup>だからである。

しかしこの二作品の大きな違いの一つとして、重要な物語が「向こう」の世界だけではなく、現実世界の方でも進行しているかどうかという点があげられる。『はてしない物語』では前半バスチアンはまだ現実世界におり、ファンタージェン国におけるアトレユの冒険談を読んでいるため、時間の経過も学校での描写もあるが、バスチアンがファンタージェンに行ってから現実世界の描写はなく、ファンタージェンでの長い月日は現実世界ではわずか一日に過ぎなかったことも、父親が心配して探し回ったということも、戻ってきから父親から聞いて初めて知る。一方『盗まれた記憶の博物館』においては、オリバーが消えた父親を探しにクワシニアへ入り込んでしまった後も1章ごとに交互にジェシカによる現実世界での探索活動の様子が描写されており、双子の存在が二つの世界の接点となっている。現実世界においても物語が進行しており、時間の経過もほぼ同速度と見られる。

ここでもう一人重要な登場人物としてオリバーの双子の姉ジェシカに言及する。

## 4 ジェシカ

双子に限らず兄弟というものはお互いの性格を補完しあおうとするかのごとく相反する要素が強調されやすい。ジェシカとオリバーもその例にたがわず性格も才能も異なった分野を开花させていったようである。オリバーはすでに述べたように芸術分野に長けており性格的にも穏やかである。それに対してジェシカは理論派でコンピューターを自在に操る能力は大人も顔負けというほどである。性格的にもオリバーと正反対でしっかり者の行動派の人間として描かれている。人間の才能や性格はしばしば感性と理性の二分野に分けられることがあるが、この物語ではそれぞれを二人の人物が象徴していると言えよう。物語は第1章の最後でオリバーがクワシニアへ入った後、クワシニアと現実世界の描写が交互に描かれており、クワシニアでのオリバーの冒険がファンタジーの世界であるのに対し、現実世界でジェシカがコンピューターを駆使したり暗号を解読したり、学芸員ミリアムの協力で古い文献を解読しながら謎に迫っていく様子は、むしろミステリー小説や歴史ロマン小説の様相を呈している。

ところで、なぜクワシニアへ行ったのがオリバーであったのか？運動神経も鈍く、足も遅い。ろくに木登りもできない。そんなオリバーよりも頭の回転もはやく判断力も運動能力も高く、さらには気も強いジェシカの方が命をかけた冒険活劇には向いていたのではないだろうか。実際オリバーもクワシニアで危険に遭遇するたびに「ジェシカがいてくれたら」「ジェシカだったら」と思うことが何度もあった。しかしこれには重要な伏線があった。オリバーはこれまでどこか現実離れしたところがあり、芸術的インスピレーションが沸くと無意識に非常識な行動を取ってしまうことがあったというのだ。例えば新しい絵のアイデアが浮かぶと、無意識に店先で売られている絵筆をポケットに入れてしまう。店の者に見つかり万引きで警察へ突き出されそうになるが、ジェシカが必死に誤りその場をしのぐことができたという。

ジェシカ曰くオリバーは「夢想家」「夢遊病者」<sup>7)</sup>であり、そのたびにオリバーを現実世界へ引き戻し窮地を救っていたのが姉のジェシカだったのである。すでに物語の冒頭でこうしたエピソードが語られており、最初からオリバーの方が夢の世界に近い存在であり、そして現実世界でしっかりと地に足をつけているジェシカがオリバーを引き戻す役割であることがうかがえる。仮にクワシニアへ赴いたのがオリバーではなくジェシカだったらと考えてみよう。もともと夢の世界とは無縁のジェシカにとってクワシニアでの出来事はオリバーよりも受け入れがたいものであろう。またジェシカはオリバーのように心の中で風を描きだすことができない(クワシニアでは心中の夢が現実となって現れるため、風を描きたいという強い願いを持っていたオリバーにとってこの力が最大の武器となった)。一方現実世界ではオリバーでは碑文の解釈は不可能であったに違いない。オリバーでなければクワシニアに赴くことはできなかったであろうし、ジェシカでなければオリバーと父親を現実世界へ呼び戻すことはできなかったのである。

ところでジェシカには強力な味方がいた。ペルガモン博物館の学芸員ミリアムである。コンピューターに詳しいジェシカと、司書と学芸員の資格も持った考古学者ミリアム。この二人は理論派という点で共通しながらも守備範囲が異なるため、お互いの専門知識を生かしクワシニアとその支配者クセハーノの謎に迫ることができた。このようにジェシカにせよ、ミリアムにせよ、オリバーに付き従うガラスのはちどりニッピーにせよ、『盗まれた記憶の博物館』においては女性キャラクターの活躍が目立つ。イーザウの前作「ネシャン・サーガ」シリーズでは壮大な冒険物語としては非常に魅力的な作品であるが、主要登場人物がすべて男性という点で多少アンバランスな感が否めない。その点『盗まれた記憶の博物館』では時代に即した感覚が生きているといえよう。

## 5 失われた記憶の王国クワシニア

さて上述のように『盗まれた記憶の博物館』においては現実世界と空想の世界双方の物語が進行していくが、そもそもここでいう空想の世界“クワシニア”とはいかなる世界なのであろうか。最初に物語の中でクワシニアについての説明が登場するのはトーマスの日記の中である。トーマスが調べた文献によればクワシニアとは失われた記憶の王国であるという。発見された碑文にある「心から忘れしもの」、つまり地上で人々の記憶から忘れられたものがやってくる場所がクワシニアである。クワシニアへやってきたオリバーが最初に出会った一角獣はオリバーに向かって「クワシニアはお前がいた世界と同じひとつの世界なのだ。だがまあ、ある意味では、夢の国といえよう」<sup>8)</sup>と謎めいた言葉を残している。「物だろうと夢だろうと生き物だろうと、ほんとうの意味が消えうせてしまうと、地上から消えうせ」クワシニアへ入り込むのだという<sup>9)</sup>。夢も人間が目を覚ますと同時に忘れられてしまう場合が多く、そうした夢は全てクワシニアにやってくる。人間がクワシニアへやってくる例もたくさんあるが、これは「死」と同義ではない。死んでも人々の記憶に残っているものはクワシニアにやってくることはない。逆に生きていても人々から忘れ去られ、存在意義がなくなった人物は気づくとクワシニアへやってきているという。例えばソクラテスの弟子であるというエレウキデスは、ソクラテスの説を支持し続けたため、師の処刑後、牢獄に幽閉されていた。食事を運ぶ看守はいたが、人々は哲学者エレウキデスの存在を忘れてしまった。そしてある日エレウキデスが気づくと牢獄の扉が開いており、抜け出してみるとそこはクワシニアだったというのだ。ソクラテスは死後もなお人々の記憶に残っていたためクワシニアへやってくることはなかった。一方エレウキデスは生き長らえつつも哲学者としての彼の本质が忘れ去られてしまったためクワシニアへ入ってきたのだ<sup>10)</sup>。

物語はこのクワシニアを支配するクセハーノが

クワシニアだけでなく、生きた記憶の国、現実世界をも支配しようとし、そのたくらみに気づいたトーマス、ジェシカ、オリバー、ミリアムのそれぞれの攻防を描いている。一見すると非現実世界のさまざまな冒険談は確かにファンタジー文学の特徴をあらわしているが、ここで描かれているのは単なる空想の世界というだけでなく、現在と過去、記憶と忘却の関係だと言えよう。

記憶については上述ミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』でも言及されている。パスチアンはファンタジーエンに来てから自分の願いを一つ一つかなえていくが、望みがかなうごとに現実世界での記憶を一つずつ失っていく。現実世界での記憶を全て失ったものは「元帝王たちの都」にたどり着く。記憶、つまり過去をなくしたのものには未来もない。ことばも忘れてしまった元帝王たちは話をするもお互いを認識することもできず、ただ黙々と無意味な文字遊びをくりかえすだけである。アルファベットを延々と並べていけば、いつか偶然に意味の通る単語ができ、いつか偶然に文章となり、いつか偶然に詞が生まれるかもしれない、という創造とはかけ離れた不毛な遊びである<sup>11)</sup>。大切な記憶を失ったものは自分が何をすべき存在なのかも見失ってしまう。過去は人間の存在意義を示すもので、過去を失ってしまえば存在意義も失うという恐ろしい場面がここに描かれている。

こうした記憶をテーマに扱った文学が20世紀後半ドイツでは多数登場した。クリスタ・ヴォルフは著書『幼年期の構図』の冒頭でこう述べている。

「過去は死んだのではない。消え去ってしまったのではないのだ。我々がこれを自分たちから引き離し、我々と無縁のものにしてしまうのである。」<sup>12)</sup>

そしてクリスタ・ヴォルフはこの異質感 (Fremdheit) には、この記憶を持っていた人物の側に責任があるとしている<sup>13)</sup>。つまり記憶とは自然消滅するものなのではなく、我々がもう何も得ることができず興味を失った時、これを現在の我々とは異質のもの、過去のものとしてしまうの

だ。こうして記憶を失っていく人間が行き着くところを描いたのが『はてしない物語』の「元帝王たちの都」であり、一方失われた記憶が行く着くところが『盗まれた記憶の博物館』のクワシニアということができるだろう。

## 6 おわりに

ラルフ・イーザウは『盗まれた記憶の博物館』に先立ち「ネシャン・サーガ」というシリーズ作品を書いている。このシリーズも現代の少年が非現実の世界へと入り込みさまざまな冒険を体験するという筋立てであるが、『盗まれた記憶の博物館』と比較するならばいくつかの点で後者の方が読み応えがあると思われる。例えば登場人物を比較してみると『盗まれた記憶の博物館』に登場する人物はそれぞれの個性が丁寧に描かれており、主役となっているのがあくまでも現代っ子であることを読者に忘れさせない。またスリリングなストーリー展開は読者を飽きさせない。またその世界観にはミヒヤエル・エンデとの共通点が多目に多く見られるものの決して模倣作品に終わらない。独自の深みと手法、独自の解釈でエンデ自身も認めたほどである。今後の作品にもさらに期待が持てるだろう。

## 引用・参考文献

- 1) ラルフ・イーザウ著、酒寄進一訳『盗まれた記憶の博物館』あすなる書房、2002
- 2) ブライアン・アトベリー著、谷本誠剛・菱田信彦訳『ファンタジー文学入門』大修館書店、1999、P 11
- 3) ブライアン・アトベリー著、谷本誠剛・菱田信彦訳『ファンタジー文学入門』大修館書店、1999、P 16
- 4) 猪熊葉子・神宮輝夫著『イギリス児童文学の作家たち ファンタジーとリアリズム』研究社、1975、P 8
- 5) Michael Ende: *Die unendliche Geschichte*,

- 1979, Stuttgart, S. 426
- 6) 猪熊葉子・神宮輝夫著『イギリス児童文学の作家たち ファンタジーとリアリズム』研究社, 1975, P 7
- 7) Ralf Isau: *Das Museum der gestohlenen Erinnerungen*, 1997, Stuttgart, S. 6
- 8) Ebd., S. 71
- 9) Ebd., S. 73
- 10) Ebd., S. 165
- 11) Michael Ende: *Die unendliche Geschichte*, 1979, Stuttgart, S. 368
- 12) Christa Wolf: *Kinderheitsmuster*, Darmstadt, 1977, S. 7
- 13) Alleida Assmann: Gedächtnis und Literatur in *Evokationen*, München, 2000, S. 28

**Über “Das Museum der gestohlenen Erinnerungen” von Ralf Isau**

**Chie SAKURAI**

[**Abriss**] In dieser Abhandlung wird “Das Museum der gestohlenen Erinnerungen” von Ralf Isau hinsichtlich der Weltanschauung in der Phantasiliteratur und der Originalität im Roman im Vergleich mit “Die unendliche Geschichte” von Michael Ende untersucht. Weiter wird hierbei das Motiv des ‘Reichs der Erinnerungen’ analysiert und somit die Gedächtnisliteratur, die im 20. Jahrhundert in Deutschland entstanden ist, betrachtet.

[**Schlüsselwörter**] Ralf Isau, *Das Museum der gestohlenen Erinnerungen*, Michael Ende, *Die unendliche Geschichte*, die Phantasie, die Erinnerung